

Title	日本列島後期更新世洞穴遺跡の立地と利用に関する考古学的研究
Sub Title	Archaeological study on cave utilization of the late pleistocene in Japan
Author	渡辺, 丈彦(Watanabe, Takehiko)
Publisher	
Publication year	2016
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2015.)
JaLC DOI	
Abstract	<p>本研究は, 国内の洞穴遺跡・岩陰遺跡を研究対象とし, その詳細な立地と周辺の自然環境, 洞穴の形状やその形成過程などを客観的なデータとして把握した上で, 特に旧石器時代から縄文時代早期までの洞穴利用のあり方を明らかにすることを目的とする。本州最北端の青森県から九州最南端の鹿児島県までの73ヶ所の洞窟・岩陰遺跡の現地調査を行った結果, 旧石器時代から縄文時代早期にかけて, その立地が高標高・広面積に拡大すること, またすべての時代において南側開口洞窟の利用が顕著であるが, 時代を経るにつれて北側開口洞窟の利用も増えることなどが判明した。</p> <p>The purpose of this study is to examine the cave utilization of the latter Pleistocene in Japan. As a result of field work in 73 cave site from the northernmost Aomori prefecture of Honshu island to the southernmost Kagoshima prefecture of Kyushu , the following conclusion is reached.</p> <p>(1) From the Late Pleistocene to Holocene, altitudes of the caves used by prehistoric man became of higher and its square measure became larger.</p> <p>(2) In all period, caves opened in the south direction was used. Nevertheless period became new, caves opened in the north direction comes to be gradually used too.</p>
Notes	研究種目：基盤研究(C)(一般) 研究期間：2013～2015 課題番号：25370905 研究分野：先史考古学
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_25370905seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370905

研究課題名(和文) 日本列島後期更新世洞穴遺跡の立地と利用に関する考古学的研究

研究課題名(英文) Archaeological study on Cave Utilization of the Late Pleistocene in Japan

研究代表者

渡辺 丈彦 (Watanabe, Takehiko)

慶應義塾大学・文学部・准教授

研究者番号：90343003

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、国内の洞穴遺跡・岩陰遺跡を研究対象とし、その詳細な立地と周辺の自然環境、洞穴の形状やその形成過程などを客観的なデータとして把握した上で、特に旧石器時代から縄文時代早期までの洞穴利用のあり方を明らかにすることを目的とする。

本州最北端の青森県から九州最南端の鹿児島県までの73ヶ所の洞窟・岩陰遺跡の現地調査を行った結果、旧石器時代から縄文時代早期にかけて、その立地が高標高・広面積に拡大すること、またすべての時代において南側開口洞窟の利用が顕著であるが、時代を経るにつれて北側開口洞窟の利用も増えることなどが判明した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine the cave utilization of the latter Pleistocene in Japan. As a result of field work in 73 cave site from the northernmost Aomori prefecture of Honshu island to the southernmost Kagoshima prefecture of Kyushu, the following conclusion is reached.

(1) From the Late Pleistocene to Holocene, altitudes of the caves used by prehistoric man became of higher and its square measure became larger.

(2) In all period, caves opened in the south direction was used. Nevertheless period became new, caves opened in the north direction comes to be gradually used too.

研究分野：先史考古学

キーワード：洞窟 岩陰遺跡 遺跡立地 旧石器時代 縄文時代草創期 縄文時代早期

1. 研究開始当初の背景

欧州や中東の旧石器時代研究では、伝統的に一定領域内に展開する遺跡を立地環境にもとづき分類・類型化した上で、その領域内で行われている様々な人類活動を総合的に比較・検討するという流れがあり、洞穴・岩陰遺跡(以下、「洞穴遺跡」と呼ぶ)も特に注意を払われている。また、国内に目を転じると、特に山岳地帯に立地する縄文時代草創期・早期の洞穴遺跡や、海岸地帯に立地する弥生時代の洞穴遺跡を対象に、開地遺跡との関係性を積極的に論じる研究も多く見られる。

一方、日本列島で確認されている旧石器時代に属する遺跡は10,150を数える(日本旧石器学会2010)が、そのほとんどは台地状に展開する開地遺跡であるため、日本の旧石器時代像は開地遺跡の調査成果・研究から形作られたものであり、洞穴遺跡という要素が加味されることは無かった。

2. 研究の目的

旧石器時代における人類の洞穴利用の実態を考える上では、まずその利用対象となった洞穴自体の性状を共通の客観的な尺度の中で把握する必要がある。しかしながら、現在、日本の洞穴遺跡数は概ね690箇所を数え(麻生1998)、本格的な発掘調査が行われた遺跡は172箇所あるが、それぞれの洞穴自体の規模・形状の計測や周辺自然環境などの把握方法はまちまちであり、相互の比較検討や類型化が困難である。現在、確実な旧石器の文化層を検出した例は10箇所、考古学的・地理学的検討から旧石器文化層の存在の可能性が高い遺跡は19箇所、信頼できる発掘調査の成果により、旧石器時代に(存在していたにもかかわらず)利用されなかった洞穴遺跡が40箇所程度ある。これらのすべての洞穴遺跡で最新の計測機器(高性能小型GPS・携帯用小型三次元レーザー測量機器)を用いて現地調査(測量)などを行った上で、同一の尺度の中でその規模・形状、周辺自然環境を把握・類型化し、旧石器時代に利用された洞穴、そして利用されなかった洞穴のそれぞれの性状を明らかにする。さらに、利用された洞穴について、洞穴の形状・規模などと、残された旧石器等の遺物の種類・分布などの関係を調べ、日本旧石器時代における洞穴利用のあり方を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では、まず発掘調査された国内の洞穴遺跡の中で、おもに旧石器文化層を確認した洞穴を対象に、携帯用高性能GPS・携帯用小型三次元レーザー測量機器を用いた現地調査などを行う。次に調査で得た同一基準・尺度のデータに基づき洞穴規模・形状、

周辺自然環境を把握・類型化し、旧石器時代に利用された洞穴の性状を明らかにする。さらに洞穴の形状・規模などと、出土した遺物の種類・分布などの関係を調べ、日本旧石器時代における洞穴利用のあり方を明らかにする。

4. 研究成果

(1) 洞穴・岩陰遺跡における野外調査

研究機関中に主に東北地方、関東地方、北陸地方、東海地方、中国地方、四国地方、九州地方の合計73ヶ所の洞穴・岩陰遺跡において、高性能小型GPS・携帯用小型三次元レーザー測量機器などを用いた地形測量、湧水・日照・植生などの環境調査を実施した。

具体的な調査を行った洞穴・岩陰遺跡は以下の通りである。

【東北地方】

青森県:尻労安部洞窟・九艘泊岩陰、岩手県:布佐洞窟・熊石洞窟・風穴洞窟・アバクチ洞窟・小松洞窟・蛇王洞窟・女神洞窟・関谷洞窟・瓢箪穴洞窟・龍泉新洞、宮城県:五松山洞窟、山形県:高島洞窟遺跡群(日向洞窟・火箱岩洞窟・尼子岩陰・一ノ沢岩陰・神立洞窟)、秋田県:岩井堂第1~4洞窟、福島県:塩喰岩陰。

【関東地方】

埼玉県:妙音寺洞窟・神庭洞窟・橋立岩陰。

【北陸地方】

新潟県:小瀬ヶ沢洞窟・室谷洞窟・黒姫洞窟。

【東海地方】

岐阜県:九合洞窟・港町岩陰・岩井戸岩陰。

【中国地方】

岡山県:権現谷岩陰、広島県:帝釈峽洞窟遺跡群(帝釈白石洞窟・帝釈馬渡岩陰・帝釈寄倉岩陰・帝釈猿神岩陰・帝釈観音堂洞窟・帝釈大風呂洞窟・帝釈猿穴岩陰・帝釈名越岩陰・帝釈弘法滝洞窟・帝釈穴神岩陰・戸宇牛川岩陰・久代東山岩陰・新免手入岩陰・豊松堂面洞窟)。

【四国地方】

愛媛県:上黒岩岩陰・上黒岩第二岩陰・中津川洞窟・穴神洞窟、高知県:不動ヶ岩屋洞窟・奥谷南遺跡・龍河洞窟・飼古谷岩陰。

【九州地方】

佐賀県:百田洞窟・白蛇山岩陰・盗人岩洞窟・儀助平洞窟、長崎県:菰田洞窟・天神洞窟・福井洞窟・直谷岩陰・泉福寺洞窟、大分県:成仏岩陰・川原田洞窟・粉洞窟・二日市洞窟・野鹿洞窟・草木岩陰、鹿児島県:黒川洞窟・片野洞窟・土浜ヤーヤ洞窟。

またこれに加えて、上記洞窟・岩陰遺跡出土の考古遺物を保管する、東北歴史博物館・山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館・長岡市立科学博物館・岐阜県立博物館・庄原市帝釈峡博物館展示施設時悠館・愛媛県歴史文化博物館・城川歴史民俗資料館・高知県立歴史民俗資料館・佐賀県立博物館・大分県立博物館・別府大学付属博物館・吹上町歴史民俗資料館・鹿児島県歴史資料センター黎明館などにおいて遺物の実見調査も実施した。

上記の洞窟・岩陰遺跡での野外調査及び遺跡出土資料所蔵研究機関等での実見調査の結果に基づき、現在まで旧石器時代と縄文時代草創期・早期の洞窟・岩陰遺跡の標高・開口方向・面積等について比較検討を実施した。

(2) 洞窟・岩陰遺跡の標高 [図1]

野外調査等を実施した旧石器時代及び縄文時代草創期・早期の洞窟・岩陰遺跡の標高を図1に示した。旧石器時代については標高400～500m前後の比較的標高の高い洞窟・岩陰の利用も認められるものの、概ね150m以下の低い標高の洞窟・岩陰が好んで利用される傾向が看取される。一方、縄文時代草創期になると、1000mをこえる高い標高の洞窟・岩陰も利用されるようになり、150m以下の利用の割合は低くなる。そしてその傾向は早期に入りより顕著なものとなる。

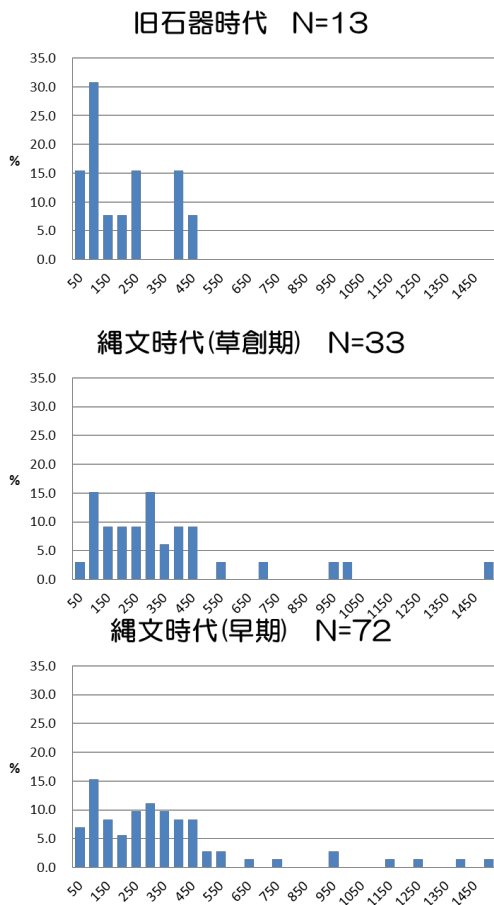


図1 旧石器時代と縄文時代草創期・早期の洞窟標高

(3) 洞窟・岩陰遺跡の開口方向 [図2]

野外調査等を実施した旧石器時代及び縄文時代草創期・早期の洞窟・岩陰遺跡の開口方向を図2に示した。これまで、経験則的に先史時代に利用される洞窟・岩陰遺跡の開口方向は南側に偏るとされていたが、今回の研究成果はこれを支持するものとなった。旧石器時代から縄文時代早期にいたるまで、南に面した洞窟・岩陰の割合が全体の6割程度を占め、逆に北に近い位置に開口する洞窟・岩陰の割合は極めて低い。ただし北側に面する洞窟・岩陰を忌避する傾向は時代が新しくなにつれて薄くなり、旧石器時代約8.7%、縄文時代草創期12.9%、同早期17.8%となっている。

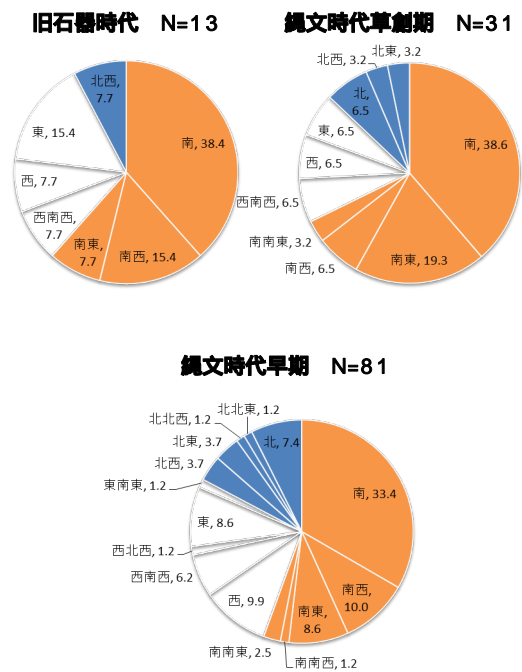


図2 旧石器時代と縄文草創期・早期の洞窟開口方向

(4) 洞窟・岩陰遺跡の開口方向 [図3]

野外調査等を実施した旧石器時代及び縄文時代草創期・早期の洞窟・岩陰遺跡の面積を図3に示した。旧石器時代については40㎡以下の比較的小型の洞窟・岩陰遺跡が使用される傾向が強いが、60～120㎡の比較的中型のものも一程度利用されている。

その一方、縄文時代草創期の洞窟・岩陰については、引き続き小型洞窟を利用する傾向が見て取れるものの、中型の洞窟利用は低調となり、数は少ないものの200㎡を超えるような大型の洞窟・岩陰の利用も始まるようになる。この点については、縄文時代早期についても同様であるが、その傾向はより顕著なものとなっている。

(5) 研究成果のまとめ

以上の(2)~(4)をまとめると、旧石器時代については南に開口した比較的標高が低く、狭い面積の洞窟・岩陰が利用される傾向がある。その一方、縄文時代草創期になると、利用される洞窟・岩陰遺跡の標高は総体的に高いものとなり、広い面積のものも現れる。さらに南に開口する洞窟・岩陰を好んで利用する傾向は継続するが、旧石器時代に比べて北に開口する洞窟の利用頻度もわずかながら増加している。この一連の傾向は、縄文時代早期になるとより顕著なものとなる。

これらの研究成果は、5.『主な発表論文等』においてすでにその一部を利用・公表しているところであるが、(5)「研究成果のまとめ」で指摘した旧石器時代と縄文時代草創期・早期の洞窟・岩陰遺跡の利用の在り方の変化は、先史時代の人々の生活領域・生業等の変化によるものと考えられ、今後より詳細な分析と解釈をおこなった上で、改めて雑誌論文等でその成果の公表をおこなう予定である。

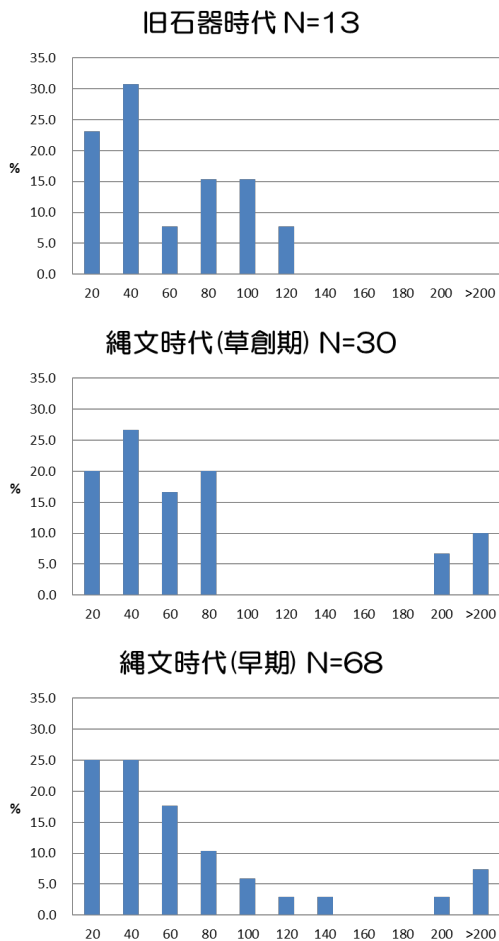


図3 旧石器時代と縄文時代草創・早期の洞窟面積

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

渡辺文彦 (2015) 石器は海峡を越えたか - 本州最北端出土旧石器の系譜に関する一試

論 - 史学,84- 1 ~ 4, 三田史学会, 東京, pp.551-567. 査読有

〔学会発表〕(計 3 件)

平澤悠・服部太一・高橋鵬成・澤浦亮平・澤田純明・渡辺文彦・鈴木敏彦・佐藤孝雄・奈良貴史 (2015.12.19) 青森県尻労安部洞窟, 第29回東北日本の旧石器文化を語る会, アオーレ長岡(新潟県・長岡市)

渡辺文彦・平澤悠 (2015.11.7) 石器は海峡を越えたか - 下北半島北端出土の二種類の刺突具の系譜をめぐって -, 公開シンポジウム「下北の石器時代」, むつ来さまい館(青森県・むつ市)

大西凜・高山理美・高橋鵬成・平澤悠・澤浦亮平・澤田純明・渡辺文彦・佐藤孝雄・奈良貴史 (2014.12.13) 安部遺跡(尻労安部洞窟)-旧石器時代の洞窟遺跡-, 平成26年度青森県埋蔵文化財発掘調査報告会, 青森県総合社会教育センター(青森県・青森市)

〔図書〕(計 1 件)

奈良貴史・渡辺文彦・澤田純明・澤浦亮平・佐藤孝雄 編 (2015) 青森県下北郡東通村尻労安部洞窟 I - 2001~2012年度発掘調査報告書 -, 六一書房, 東京, pp.9-18, 20-21, 49-52, 149-156.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡辺 文彦 (WATANABE, Takehiko)
慶應義塾大学・文学部・准教授
研究者番号: 90343003

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし